

ベネッセ教育総合研究所主催
株式会社ベネッセi-キャリア、株式会社進研アド共催
大学教職員向けウェビナー

「大学生の主体的な学びを促す授業・環境のデザイン」 「基調報告」配布用資料

大学教職員向けウェビナー 主催 ベネッセ教育総合研究所
共催 株式会社ベネッセi-キャリア、株式会社進研アド

大学生の主体的な学びを促す 授業・環境のデザイン

全国4千人の大学生調査結果をもとに考える

大学生の主体性は低下しているのだろうか

ベネッセ教育総合研究所が2008年から数年ごとに実施している全国の大学生対象の調査結果などを材料に、大学教職員、高校教員、現役大学生とともに、この問いを軸に、高大接続や大学での授業や環境のあり方などの議論をすすめます。是非ご参加下さい。

- 1 16:00~16:30 基調報告
- 2 16:30~18:00 パネルディスカッション

「コロナ禍の大学生調査等から考える、
大学生の学びと育ち」

●報告者



ベネッセ教育総合研究所
主要研究員

木村治生



関西大学
教育推進部 教授

山田剛史

●登壇者

(大学) 伊藤幸一 (武蔵野大学アンブレラシップ学部 学部長)
(大学) 今村亮 (桜美林大学 入学部 高大連携コーディネーター)
(高校) 後田麻蔵 (長崎県立諫早高等学校-附属中学校 指導教諭)
(高校) 廣瀬志保 (山梨県立笛吹高等学校 校長)
(大学生) 浅野ひかる (岡山大学4年 若者ダボス会議One Young World参加者)
(大学生) 平田正英 (慶應義塾大学 環境情報学部1年)
木村治生 (ベネッセ教育総合研究所主要研究員)

校内の友人関係

話をしたり一緒に遊んだりする友だち

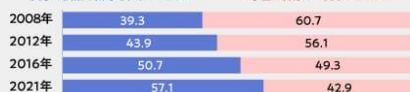


大学教育観

学習方法 (%)

[A] 大学での学習の方法は、
大学の授業で指導をうけるのがよい

[B] 大学での学習の方法は、
学生が自分で工夫するのがよい



出典 ベネッセ教育総合研究所「第4回大学生の学習・生活実態調査 データ集」より

参加費
無料
定員500名
(申込み順)

日時
10/22(土)

16時 ~ 18時

ZOOMウェビナーにて

申し込みは
こちら→



2022年10月22日(土)
ベネッセ教育総合研究所

大学生の主体的な学びを促す
授業・環境のデザイン

【基調報告】
経年比較調査の結果から
大学生の変化をとらえる

2022年10月22日(土)






ベネッセ教育総合研究所
木村 治生

◆本日の報告について

【2】

- **目的**
 - ①大学生を対象とした経年比較調査を手がかりにして
大学生の学びと育ちの変化、大学教育の変化を明らかにする
★ご自身の大学との一致やズレを意識しながらお聞きください
 - ②後半のパネルディスカッションにつながる問題提起を行う
テーマは「大学生の主体的な学びをいかに促すか」

●内容（全体で20分）

	Part 1	調査概要(3分) 4 どのような調査かについて説明します	4
	Part 2	高校から大学入学まで(5分) 9 高校生の変化や入試にかかわる変化について解説します	9
	Part 3	大学での学びと育ち(10分) 15 大学生の学びと育ちの変化に関するデータを紹介します	15
	Part 4	まとめ(2分) 23 パネルディスカッションにつながる問題提起をします	23
	Part 5	参考資料 27	27

◆自己紹介

【3】



専門領域

木村 治生 (きむら・はるお)

- ベネッセ教育総合研究所 主席研究員
- 東京大学社会科学研究所 客員教授(～21年まで)
- 横浜創英大学こども教育学部 非常勤講師
- 文部科学省や自治体の教育政策の審議委員等を歴任

教育社会学、社会調査。主に計量的に子ども(幼児～大学生)の学習と生活、保護者のかかわり、教員の指導実態などを研究。専門社会調査士。

●「子どもの生活と学び」研究プロジェクト(2015年～)

小1～高3まで約2万組の親子の成長を追跡するパネル調査

●各大学との共同研究

- 高知大学 → 「大学教育における資質・能力の育成と卒業後の自己効力感との関係 ～高知大学卒業生調査を事例として」『高知大学教育研究論集』25、1-12(杉田郁代と共著)(2020年)
- 追手門学院大学 → 「データに見る学生の成長プロセス—「学習成果の可視化」のモデルの検討」『多面的な入試と学修成果の可視化：追手門学院大学高大接続への挑戦』73-90(2021年)

●高等教育研究

- 学習成果の可視化 → 「入学者選抜と大学入学前後の学びの関連の検討：推薦入試・AO入試に注目して」『大学教育学会誌』42(2)、29-38(2020年)
- 入試制度研究 → 「推薦入試・AO入試の効果に関するレビュー研究：「個別大学の追跡調査」と「複数高校・大学を対象とした調査」の結果に注目して」『大学入試研究ジャーナル』31、167-174(2021年)



勁草書房、2020年



Part

I

調査概要

◆調査概要

特徴

- ①全国の大学1～4年生に対して、毎回4000名を超える規模で実施
- ②2008年から定期的に行い、13年間の変化を追跡
- ③大学入学前から就職活動までの意識・行動を幅広く調査

●調査対象 ●全国の大学1～4年生

●調査方法 ●インターネット調査

●各回の調査時期・サンプル数

- | | | |
|------|-------------|---------------------------|
| ●第1回 | 2008年10月 | 4,070名(男子2,439名、女子1,631名) |
| ●第2回 | 2012年11月 | 4,911名(男子2,791名、女子2,120名) |
| ●第3回 | 2016年11～12月 | 4,948名(男子2,680名、女子2,268名) |
| ●第4回 | 2021年12月 | 4,124名(男子2,228名、女子1,896名) |

●調査内容

- 高校での学習状況／大学選択理由／大学の志望度／入学時の期待／大学生活で力を入れたこと／大学生生活の過ごし方／教職員との交流／保護者との関係／友だち関係／大学教育観／学びの機会／授業方法(対面授業・オンライン授業)に対する評価／学びに対する姿勢・態度／大学生活で身につけたこと／海外留学の意向／進路意識／建学の精神やポリシーの認知／大学生生活の満足度／学びの充実／成長実感／社会観・就労観／就職活動・インターンシップ など

●調査メンバー

- 川嶋太津夫先生(大阪大学)、杉谷祐美子先生(青山学院大学)、山田剛史先生(関西大学)、谷田川ルミ先生(芝浦工業大学)、樋口健先生(新潟大学)、小林一木・木村治生・朝永昌孝(ベネッセ教育総合研究所)

◆第4回調査の対象者の属性

【6】

●第1回調査から第4回調査までの対象者の属性に大きな偏りはない

性別	男子	女子	※以下の数値は、構成比率（%）を示している			
	54.0	46.0				
学年	1年生	2年生	3年生	4年生		
	25.0	25.0	25.0	25.0		
所属大学	4年制	6年制	通信制	昼夜開講制	専門職大学	海外の大学
	93.5	4.6	1.3	0.4	0.9	0.1

※複数回答のため合計は100%にならない

学部系統	人文系	社会学系	外国語学系	法学系	経済系	国際学系	教育学系	生活科学系	芸術学系
	13.0	6.5	3.6	7.6	16.5	2.4	5.5	2.6	2.7
	総合科学系	保健衛生系	医学系	歯学系	薬学系	理学系	工学系	農水産学系	その他
1.2	6.8	2.3	0.5	2.6	5.4	14.7	3.4	2.5	
設置主体	国立	公立	私立						
	23.2	8.2	68.6						
大学所在地	北海道・東北	関東	中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄			
	8.0	42.0	15.1	20.3	7.5	7.2			
入学難易度 (偏差値)	65以上	55~64	45~54	45未満	わからない				
	14.5	38.7	31.1	7.6	8.1				

◆こうした基本属性ごとの分析も可能な設計

◆第4回調査の背景—3つの影響

【7】

	対象者の 生年	対象者が受けた 初等中等教育	対象者が受けた 高等教育	調査結果
第1回 2008年	1984～ 1990年	1989年告示 新しい学力観と個性尊重	2004年 国立大学法人化、認証評価制度 2008年 学士課程答申 →学士力の提示、学修成果重視 →3ポリシーに基づくマネジメント	いまどきの大学生 先頭に立たず、 努力には冷めた目
第2回 2012年	1988～ 1994年	1999年告示 生きる力とゆとりの確保	2012年 質的転換答申 →アクティブ・ラーニング	授業の9割に出席しても、 自主的な勉強をするのは少数
第3回 2016年	1992～ 1998年	2002年学びのすすめ 2004年PISAショック	2016年 高大接続システム改革会議 →入試制度改革 2018年 グランドデザイン答申 →学修者本位の教育の実現	アクティブ・ラーニングが増え、 学生の学びは真面目に 一方で、大学に「面倒をみて ほしい」学生は増加
第4回 2021年	1997～ 2003年	2008・2009年告示 確かな学力の育成 2017年告示 主体的・対話的で 深い学び	2020年 教学マネジメント指針 →学修成果・教育成果の可視化 大学入学共通テスト開始	

①時代変化の影響（経済・技術など）

②教育改革の影響

③
コロナ禍の
影響

◆本日の問い

【8】

●3つの影響がどのようなところに表れているか

①大学生の気質の変化

- 能動性・主体性と受動性・依存性の共存
 - 【能動性・主体性】授業に対する取り組みは積極的になっている
 - 【受動性・依存性】大学教育に指導や支援を求める意識が強まっている
 - 課題に取り組む時間は増えているが、自主的な学習は変化がない

②高校・大学における学びの変化

アクティブラーニング

- 対話的・探究的な学びにも積極的→高校でも大学でも、AL型の授業が広がっている
- 手厚い指導→大学が準備する支援や相談を利用する割合が高まっている
- オンライン授業が大きく増加→メリットとデメリットの両方ある、一定程度は受入れ

③人間関係の希薄化

- 人間関係の希薄化→学内外の友人数が減少している
- コロナ禍に対する評価は分かれる→プラス4割、マイナス3割
- とくに2020年度入学生にマイナス影響が大きい→「成長実感ない」4割

●上記のような状況を踏まえて、

学生が主体的に学ぶために大学はどうかかわればいいのか



Part

II

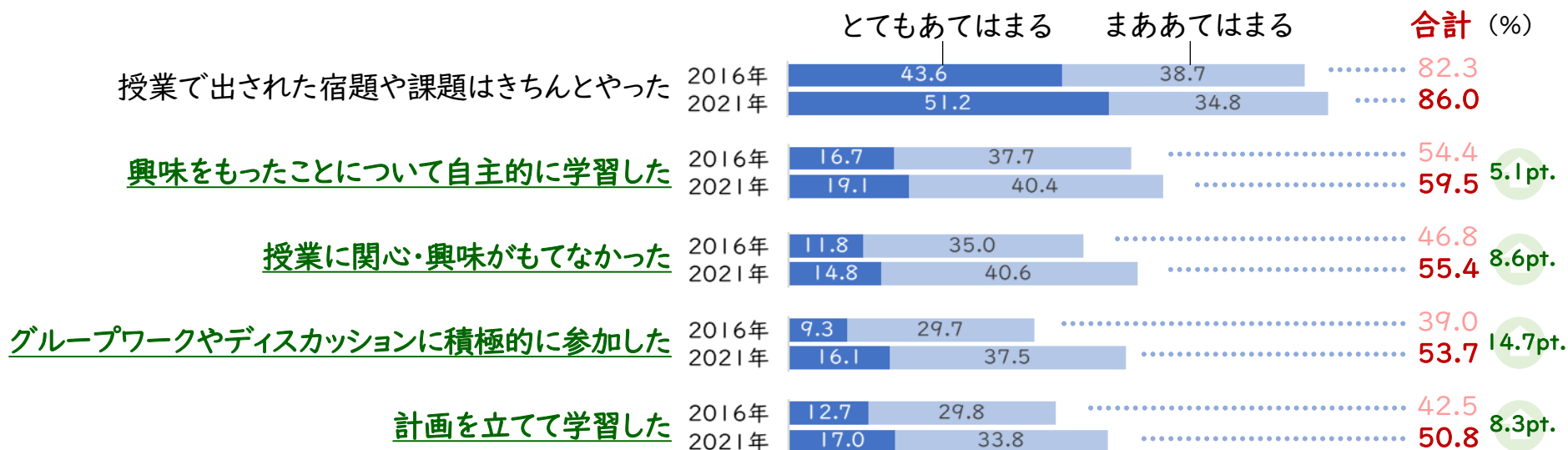
高校から大学入学まで

◆高校時代の学びの様子

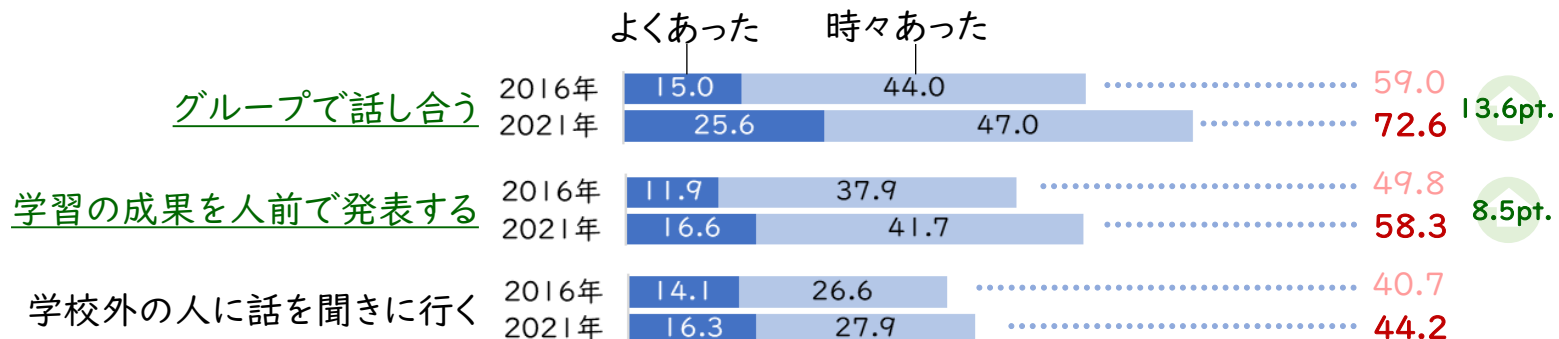
アクティブ・ラーニング

●対話的・探究的な学びが増加し、AL型の活動が広がっている

◆高校時代の学校や家での学習の様子についてお聞きします。



◆あなたは高校時代の学習に際して、次のようなことをどの程度経験しましたか。



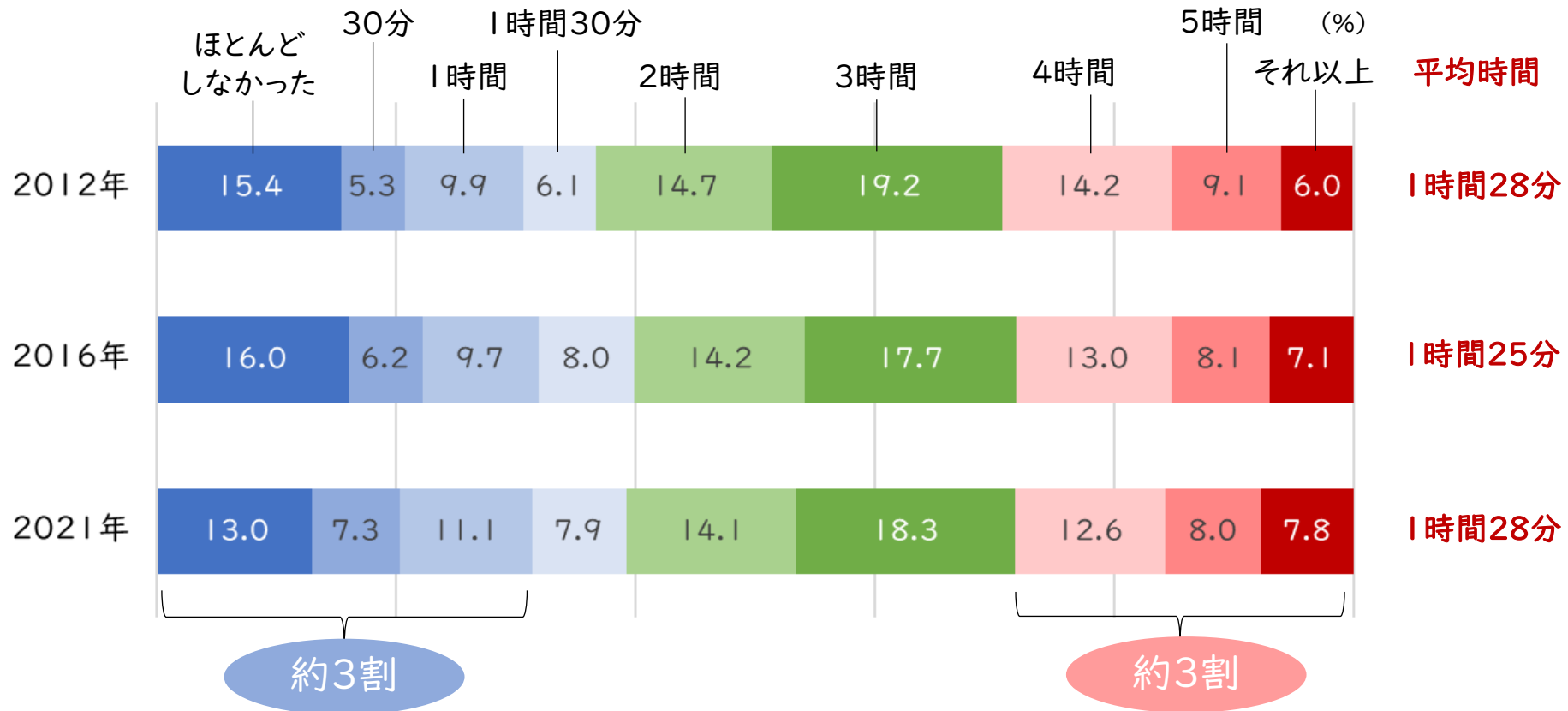
◆2025年問題→新課程を受けた高校生=入試と指導をどう変える？

◆高3のときの学習時間

【11】

●高校3年生のときの**学習時間**はほとんど**変化していない**

◆高校3年生の9月の初め頃、平日に学校の授業以外で、1日平均で何時間くらい勉強していましたか。（学習塾や予備校、家庭教師、学校での課外の補習・講習での勉強時間も含む）



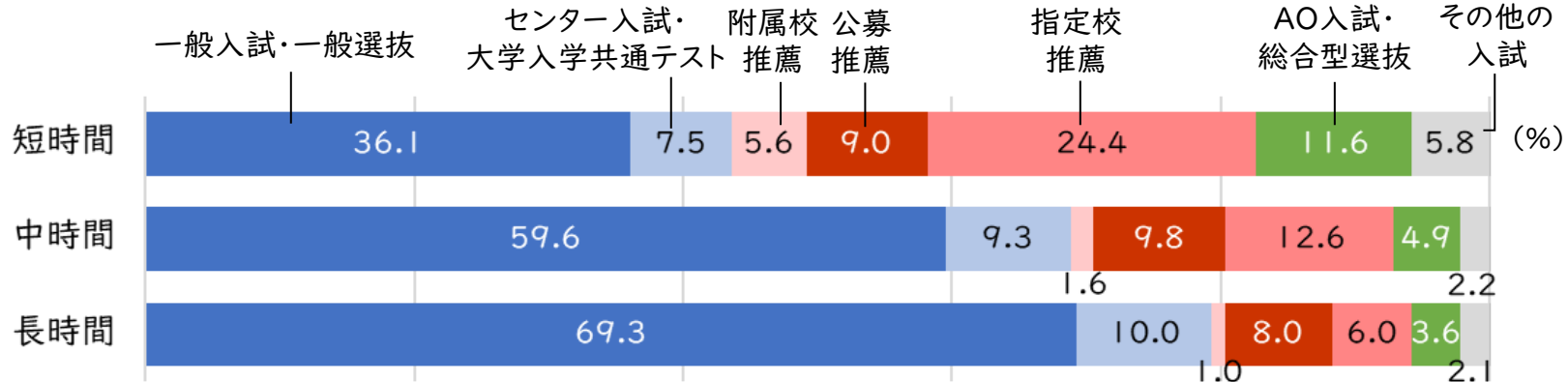
※2008年は調査していない。

◆一貫して「1時間以内」が3割、「4時間以上」が3割と**分散する**

◆高校時代の学習と入試形態

【12】

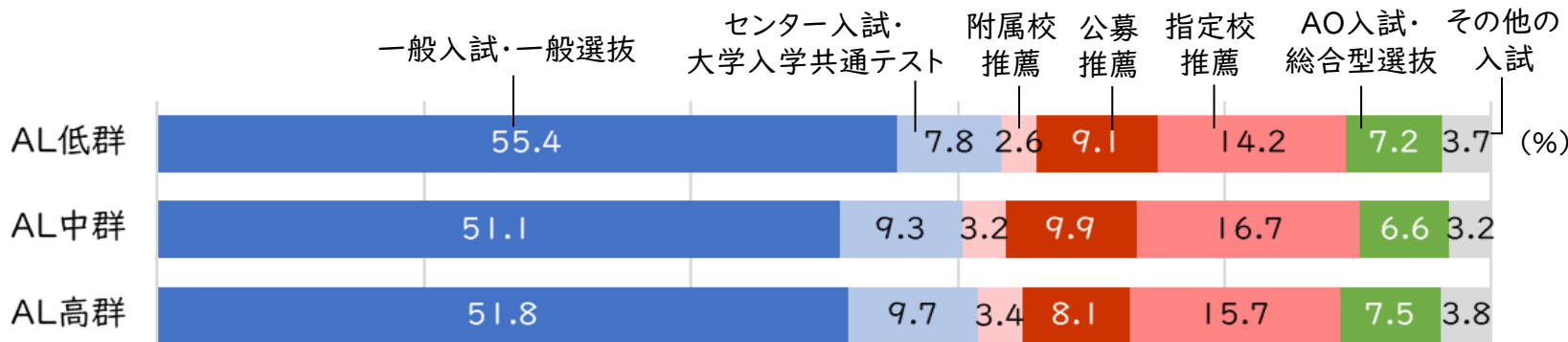
●学習時間が長いほど一般入試を選択。入学難易度を統制しても同様



※高3(9月段階)の学習時間について、各群ができるだけ均等になるように、短時間の群、中時間の群、長時間の群を分割した。短時間群は1日1時間半以下で1,617名、中時間群は1日1時間半よりも長く3時間以下で1,338名、長時間群は1日3時間より長く1,169名。

アクティブ・ラーニング

●高校のAL経験と入試形態は関連なし。入学難易度を統制しても同様



※高校時代のアクティブ・ラーニングにかかわる学習経験についての設問10項目(各3段階)の数値を合算し、AL低群、中群、高群ができるだけ均等になるように分割した。低群1,712名、中群1,070名、高群1,342名。

※10項目は以下の通り…自分で問いを立てる、課題を解決するための情報を集める、課題を解決するための方法を考える、学校外の人に話を聞きに行く、グループで話し合う、統計の知識を用いてデータを分析する、進路について調べたり考えたりする、学習の成果を人前で発表する、学習の成果をレポートや論文にまとめる、授業でデジタル端末を使う

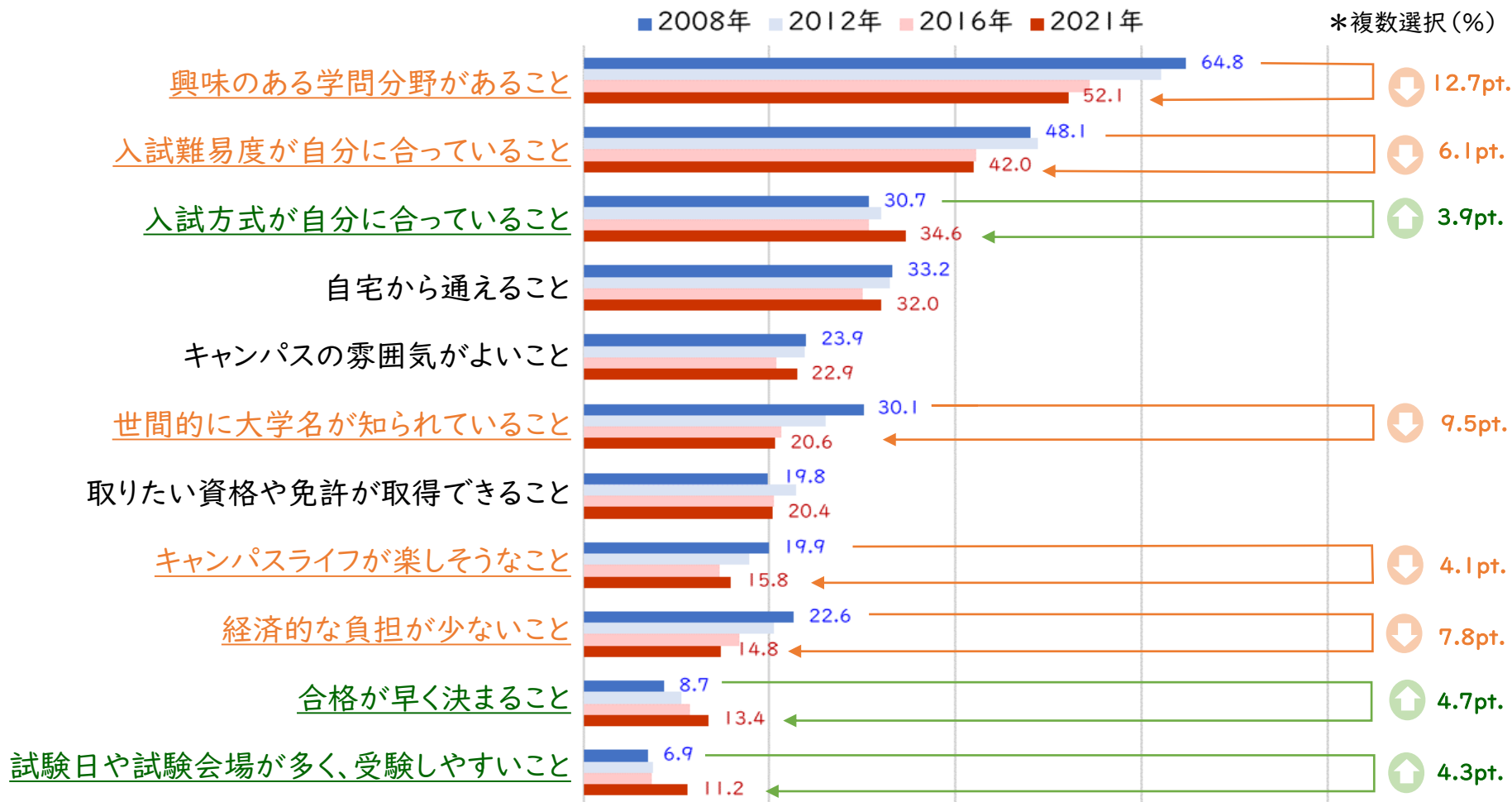
◆入試が高校時代の経験を評価するものになっているか？

◆大学・学部の選択で重視した点

【13】

● 「興味のある学問分野」「入試難易度」「大学名」は、上位だが減少

◆受験する大学・学部を決める際に重視した点について、あてはまるものをお選びください。



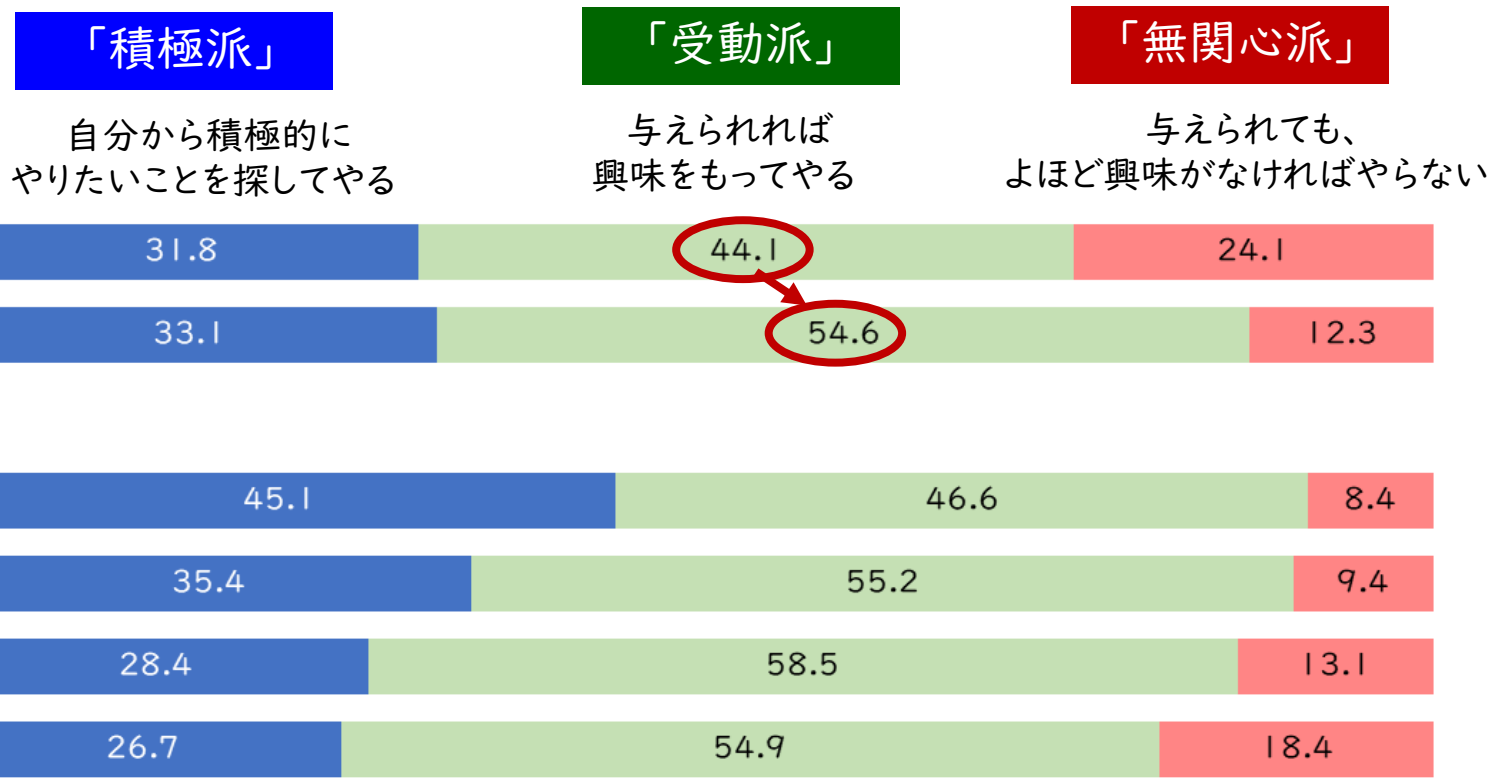
◆ 「入試方式」「早期合格」「受験しやすさ」などは、下位だが増加

◆入学時の積極性

【14】

●「受動派」の入学者が増加している

◆大学入学時のあなたの行動タイプにあてはまるものを、直感的にお選びください。



- ①どの難易度でも「受動派」が最多→「積極派」にするためにどう働きかけるか
- ②「積極派」をどう伸ばし、「無関心派」をどう支援するか

◆「受動派」や「無関心派」をいかに減らすか→入学前教育の役割も



Part

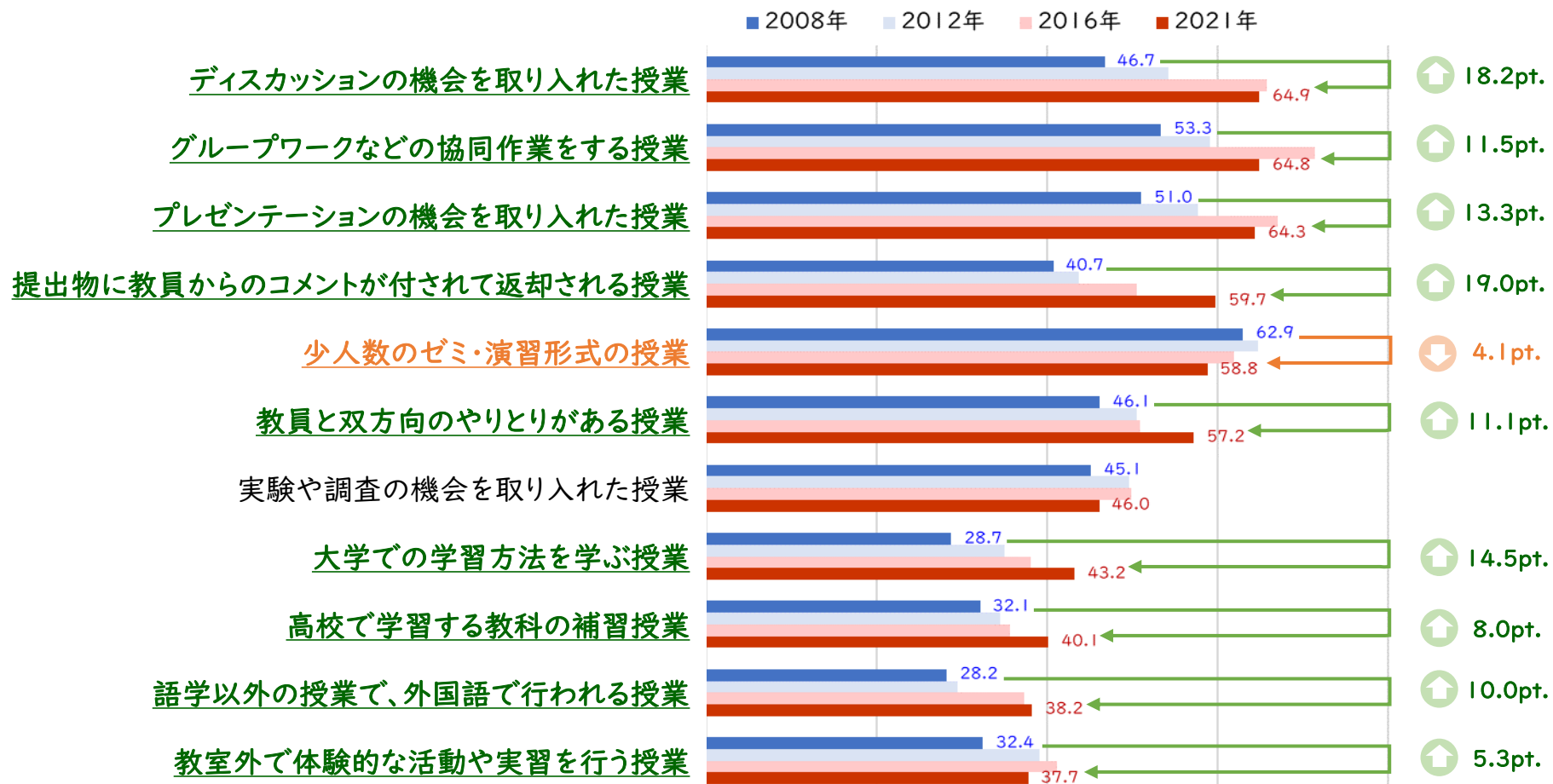
III

大学での学びと育ち

◆大学の授業の形態

●対話的・探究的な学び（アクティブ・ラーニング）の機会は広がっている

◆あなたはこれまで大学で、次のような授業を経験しましたか。 ※「よくあった」+「ある程度あった」(%)



◆「教員のコメント」「学習方法を学ぶ」「補習授業」など指導は手厚く

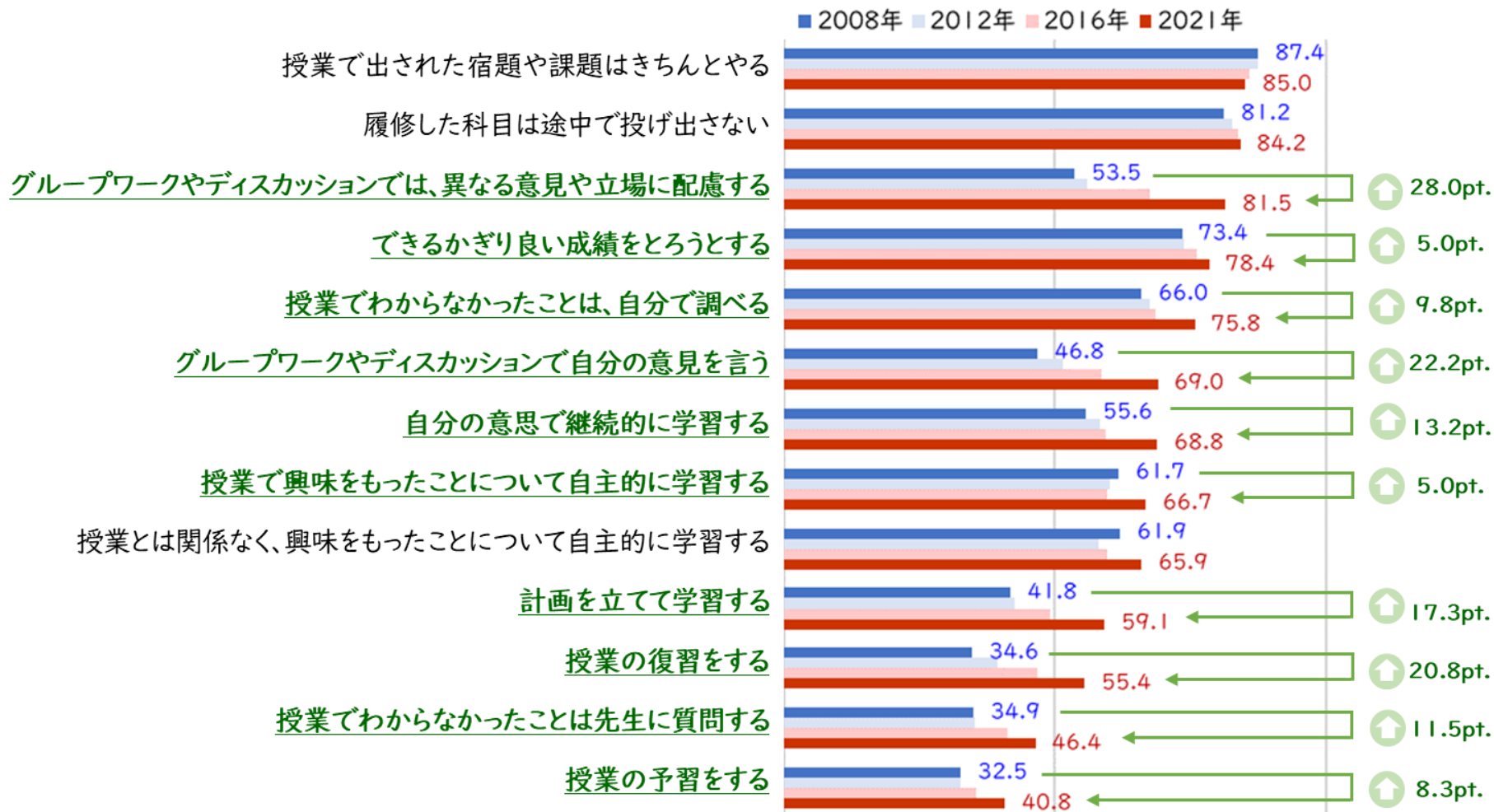
◆授業に対する取り組み

【17】

●対話的・探究的な学びへの積極性が高まり、学習態度はまじめに

◆あなたは大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか。

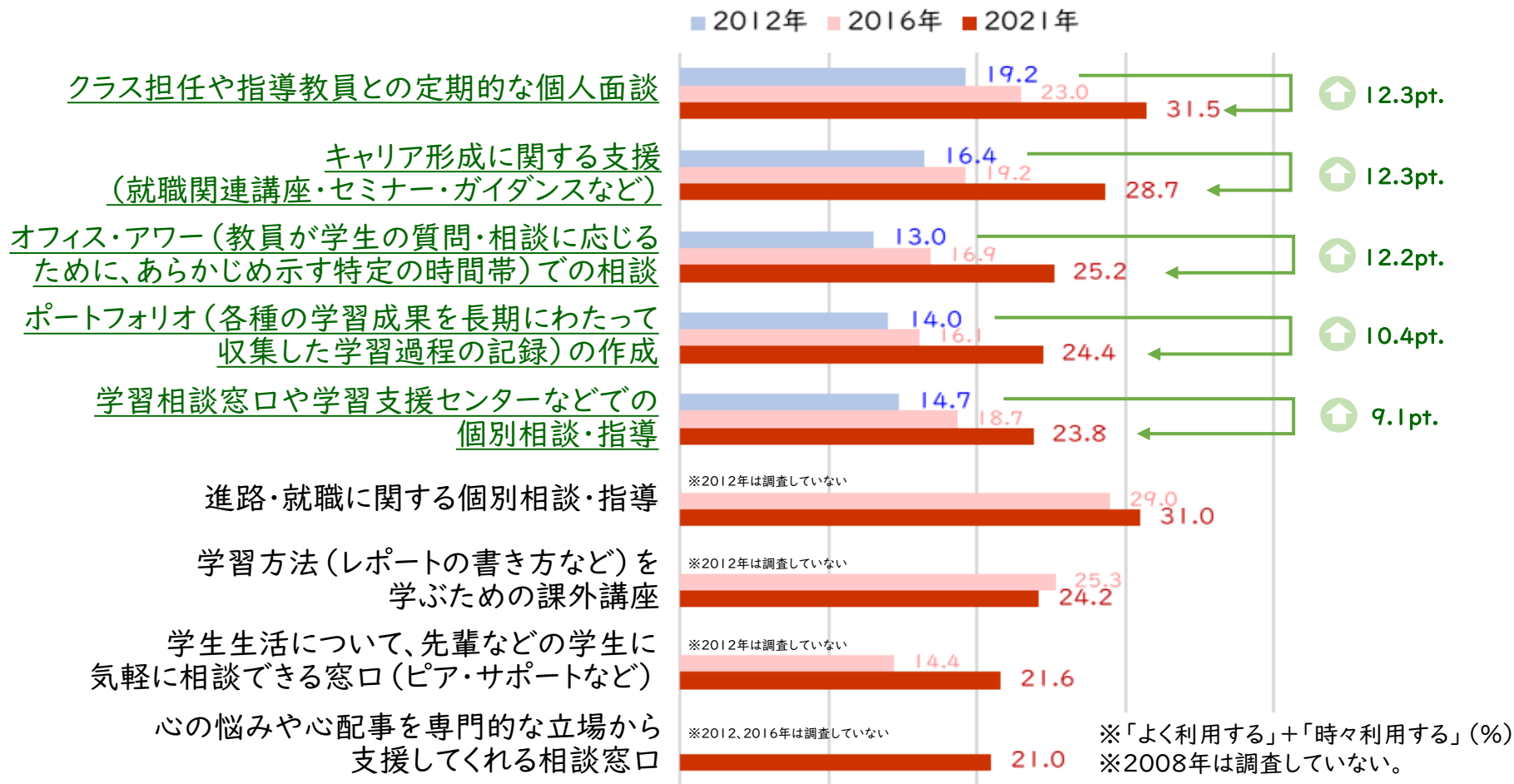
※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」(%)



◆大学による支援

●大学が準備する各種の支援や相談を利用する割合が高まっている

◆あなたは、次のような学生に対する支援環境をどの程度利用していますか。



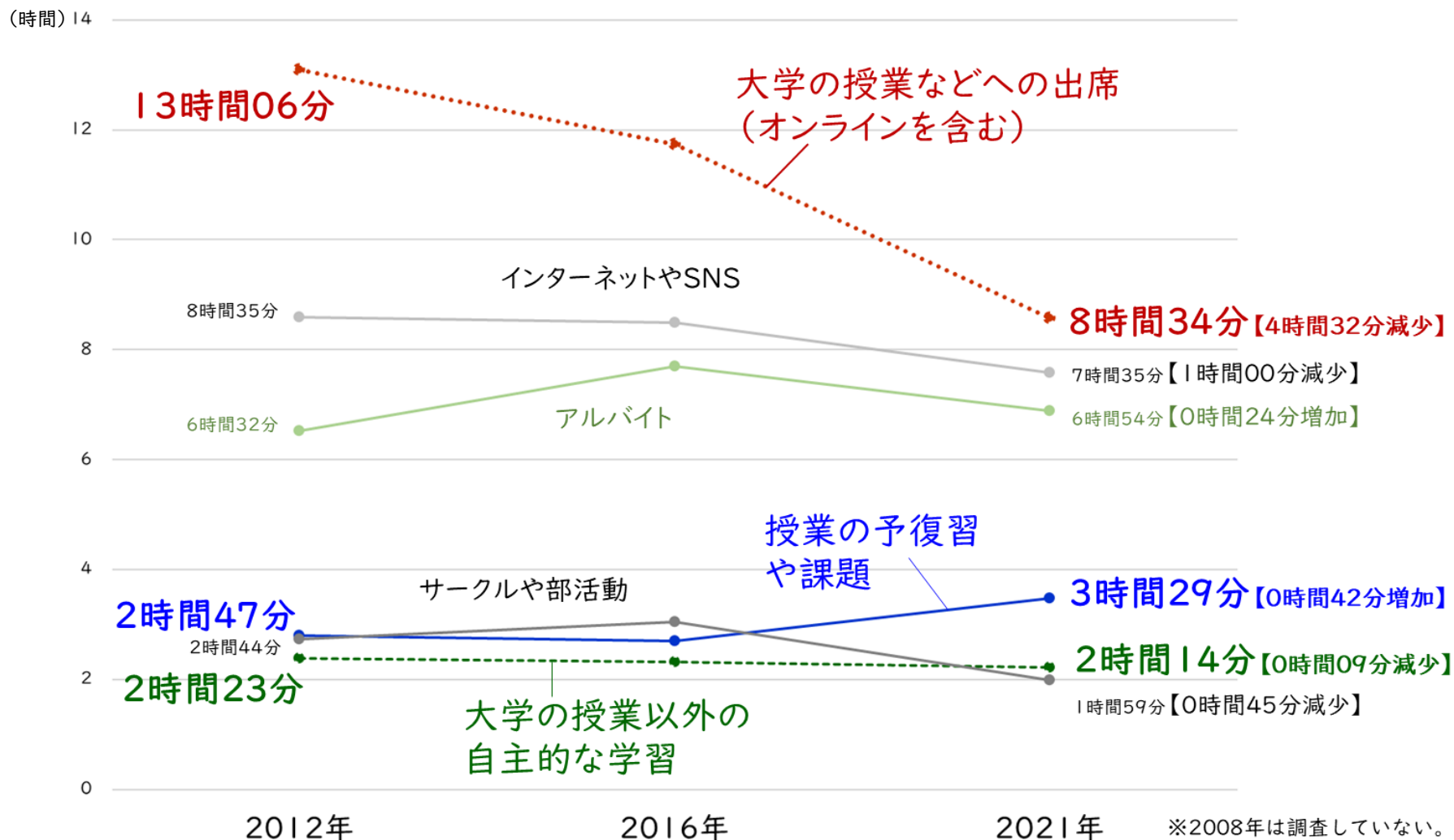
◆大学のサービスや設備に対する満足度も高まっている (図省略)

◆生活時間（1週間あたり）

【19】

●「授業時間」が大幅減、「課題」は微増で、「自主的な学習」は変わらず

◆次の項目は1週間（月曜日～日曜日）で何時間くらいになりますか。



◆大学教育観

【20】

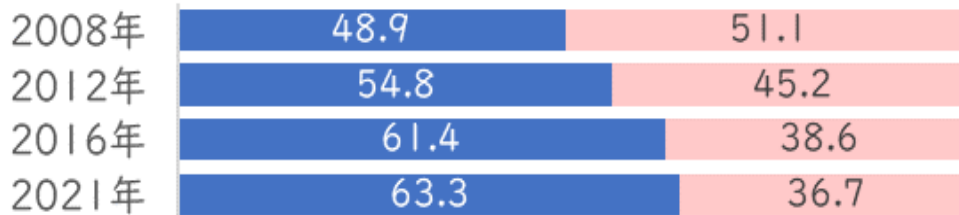
●「単位を楽に」という意見が増加、大学に指導を求める傾向強まる

◆大学教育について、あなたは次にあげるA、Bのどちらの考え方に近いですか。

①単位取得

【A】あまり興味がなくても、**単位を楽にとれる授業**がよい

【B】単位をとるのが難しくても、**自分の興味のある授業**がよい

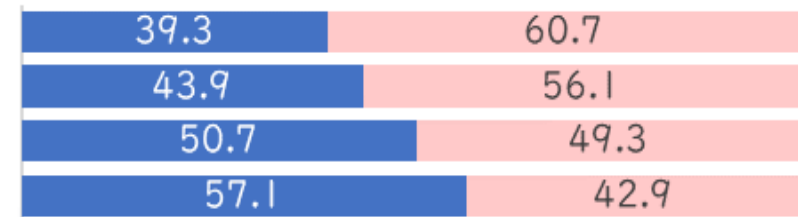


②学習方法

(%)

【A】大学での学習の方法は、**大学の授業で指導**をうけるのがよい

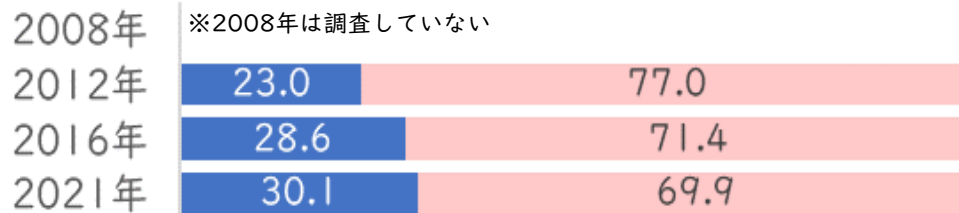
【B】大学での学習の方法は、**学生が自分で工夫**するのがよい



③責任

【A】学生が知識や技能を身につけられるかどうかは、**大学の教育の責任**だ

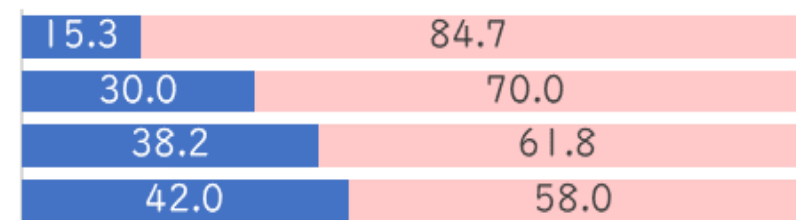
【B】学生が知識や技能を身につけられるかどうかは、**学生自身の責任**だ



④学生生活

【A】学生生活については、**大学の教員が指導・支援**するほうがよい

【B】学生生活については、**学生の自主性に任せ**るほうがよい

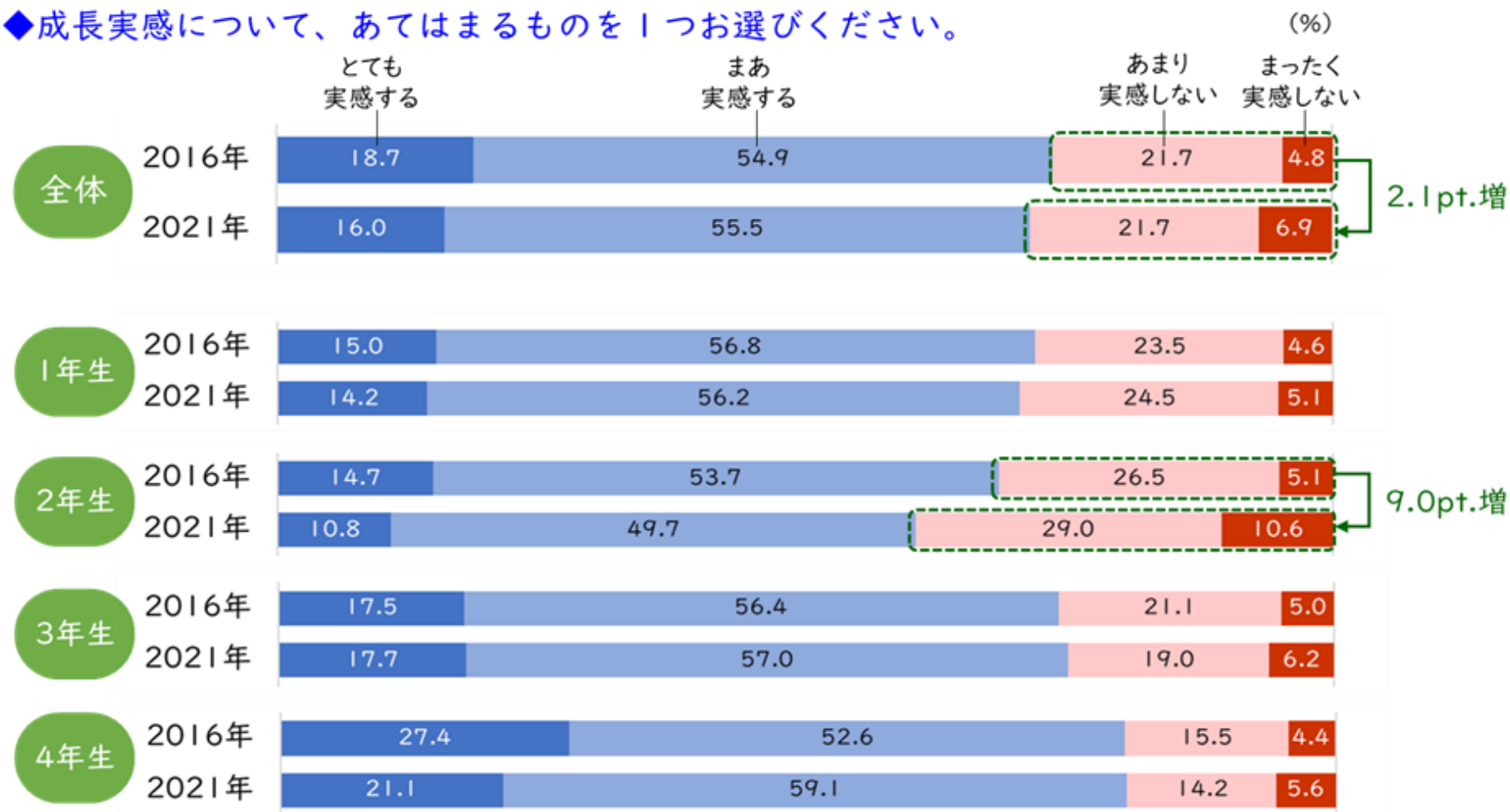


◆Riesman (1980) が唱えた「**学生消費者主義**」に似た状況

◆成長実感

●他の学年と比べて2020年度入学生の成長実感が低い

◆成長実感について、あてはまるものを1つお選びください。

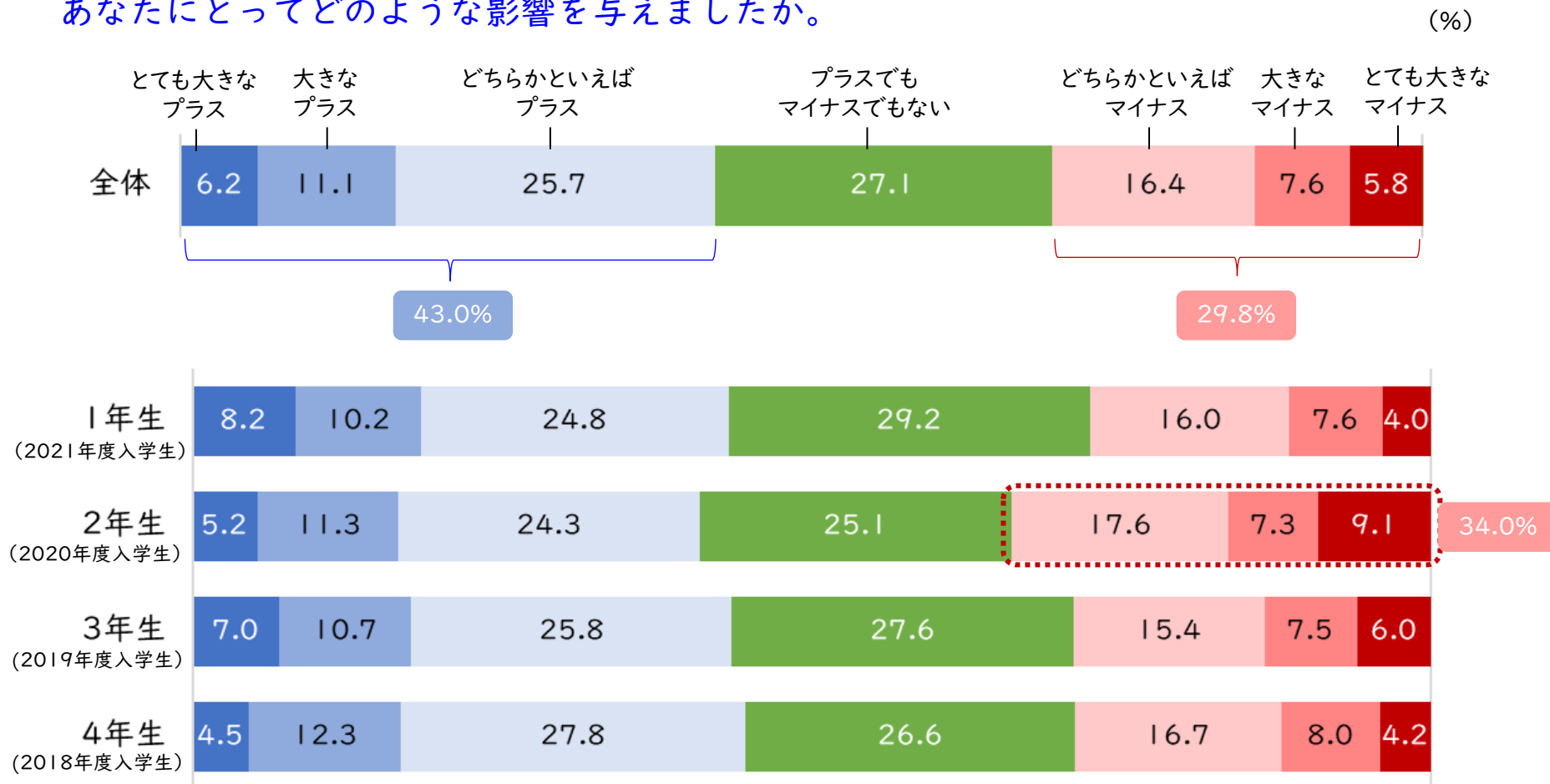


※2016年の1年生は2016年度入学生、2年生は2015年度入学生、3年生は2014年度入学生、4年生は2013年度入学生。
2021年の1年生は2021年度入学生、2年生は2020年度入学生、3年生は2019年度入学生、4年生は2018年度入学生。

◆コロナ禍の影響

● 「プラス」 4 : 「どちらでもない」 3 : 「マイナス」 3

◆ 今回の新型コロナウイルスの感染拡大に伴ういろいろな出来事は、あなたにとってどのような影響を与えましたか。



◆ 2020年度入学生に「マイナス」がやや多い



Part

IV

まとめ

◆本日の問い（再掲）

【24】

●3つの影響がどのようなところに表れているか

①大学生の気質の変化→大学生の主体性は低下したのか？

- 能動性・主体性と受動性・依存性の共存
 - 【能動性・主体性】授業に対する取り組みは積極的になっている
 - 【受動性・依存性】大学教育に指導や支援を求める意識が強まっている
 - 課題に取り組む時間は増えているが、自主的な学習は変化がない

②大学での学びの変化→どのように働きかければよいのか？

- 対話的・探究的な学びにも積極的→高校でも大学でも、AL型の授業が広がっている
- 手厚い指導→大学が準備する支援や相談を利用する割合が高まっている
- オンライン授業が大きく増加→メリットとデメリットの両方ある、一定程度は受入れ

③人間関係の希薄化→人間関係をどう支えるか？

- 人間関係の希薄化→学内外の友人数が減少している
- コロナ禍に対する評価は分かれる→プラス4割、マイナス3割
- とくに2020年度入学生にマイナス影響が大きい→「成長実感ない」4割

●上記のような状況を踏まえて、

学生が主体的に学ぶために大学はどうかかわればいいのか

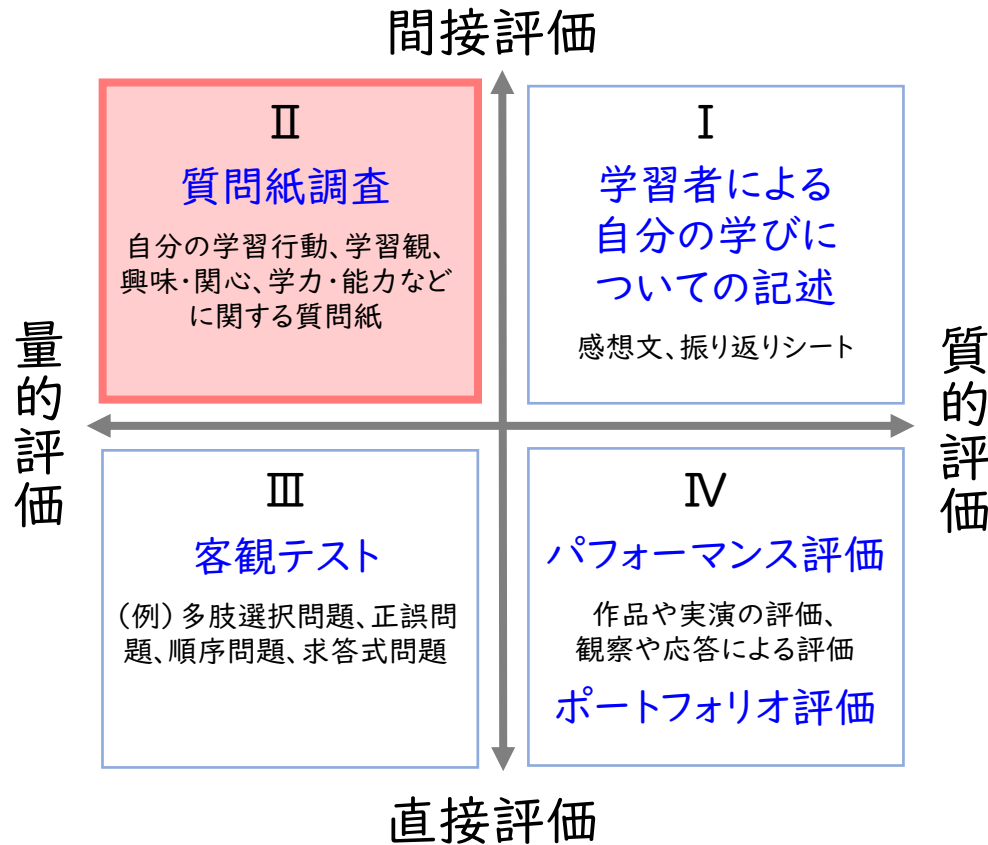
◆今回の調査結果をどう使うか

●「学修成果の可視化」を行う際の参考資料に

◆学修評価の分類

(松下佳代「アクティブラーニングをどう評価するか」

松下佳代・石井英真(編)『アクティブラーニングの評価』東信堂, 3-25, 2016)



①本調査は「II」に該当
→全国平均などをベンチマークデータとして利用

- 学習プロセスを明らかにし、
教学をどう変えていくか
検討するための材料になる
- 直接評価の代替にはならない

②プログラムの評価には
「III」も必要
→直接評価と間接評価の組合せ

●すでに8割超の大学で学修行動の把握を、6割の大学で学修成果の把握を実施※しており、本調査のデータと重ね合わせてほしい

※文部科学省「令和元年度の大学における教育内容等の改革状況調査」の結果

◆本調査の詳細はこちら

●ベネッセ教育総合研究所のホームページより

The screenshot shows the homepage of the Benesse Educational Research and Development Institute. The header includes the Benesse logo and navigation links for '総合トップ', '研究者のかたへ', '教員のかたへ', '保護者のかたへ', and 'メディアのかたへ'. Below the header is a navigation menu with categories like '研究所について', '調査・研究データ', 'オピニオン', '特集', '教育情報', 'メルマガ登録', and 'お問い合わせ'. The main content area features a large blue banner with the title '高等教育の未来を考える' (Thinking about the Future of Higher Education). The banner text reads: '各界で活躍されている有識者の方々と、高等教育の現状から課題を洗い出し、課題解決の具体的な方法を大学や社会に提言し、アクションにつなげていく' (With experts active in various fields, we identify issues from the current state of higher education, propose specific methods for solving these issues to universities and society, and take action). To the right of the banner is a section titled '新しい時代' (New Era) with the text '様々な場所で彼らのインタ [Well-being]'. The banner also includes a play button icon and a video thumbnail showing people in a meeting.

<https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=5772>

- 本日紹介しきれなかった調査結果や基礎集計表・基礎クロス表などが掲載されています。是非、ご覧ください
- ご質問、ご相談は終了後のアンケートをご利用ください。



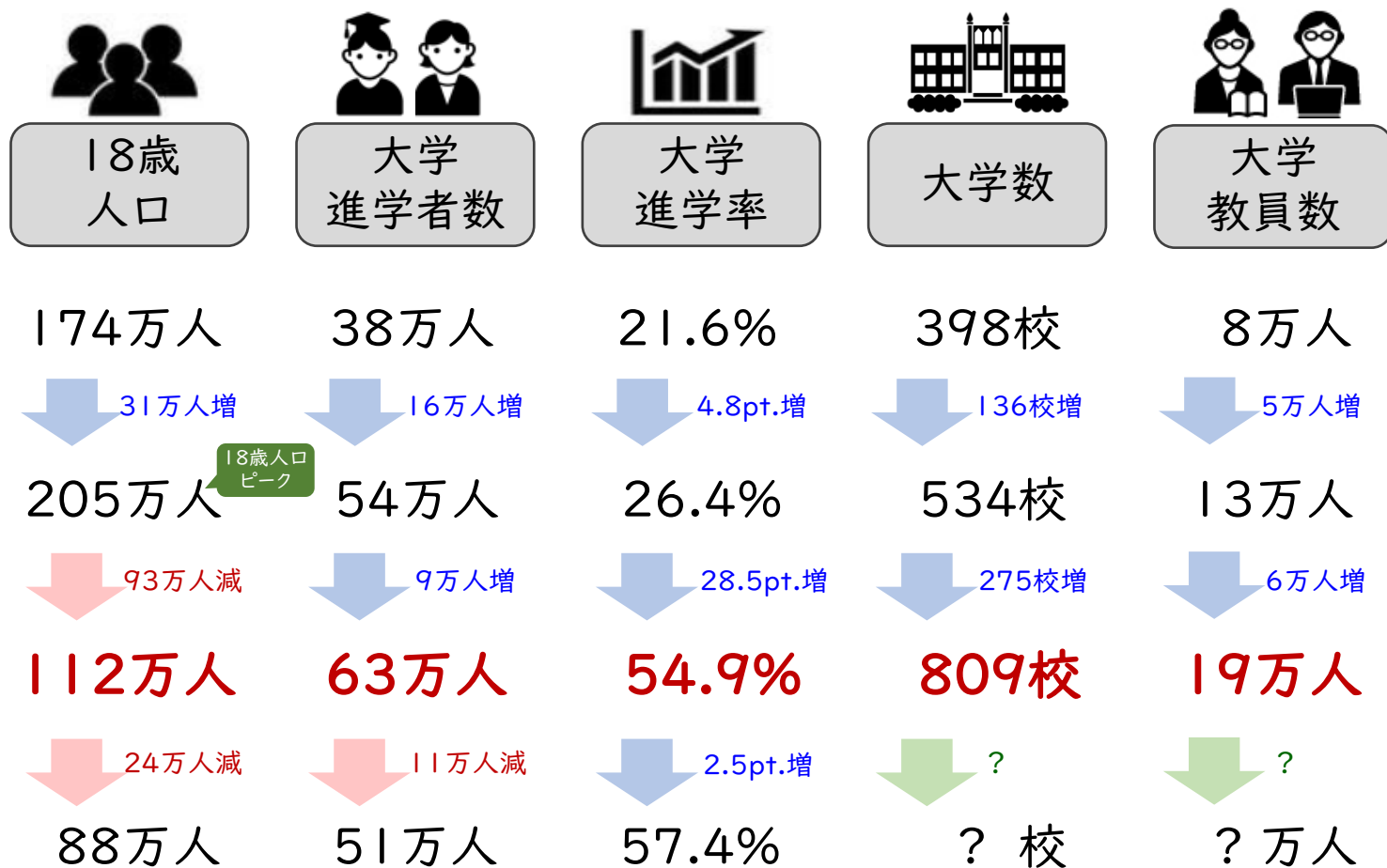
Part

V

參考資料

◆大学をとりまく環境の変化

●18歳人口が減少に転じても、大学進学者数は増加し続けてきた



※1972年、92年の数値は文部科学省「学校基本調査」、2022年の数値は推定値（一部は21年の数値を引用）、2040年の数値は文部科学省「大学進学者数等の将来推計」より引用して作成した。

◆この間、大学数も増え続け、私立大学の半数近くはすでに定員割れにある

◆保護者との関係

【29】

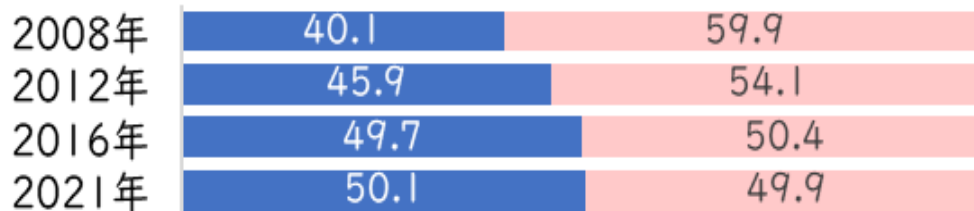
●困ったとき「保護者が助けてくれる」が08→21年で約20pt.増加

◆あなたと保護者との関係について、もっとも近いもの1つをお選びください。

①物事の決定

【A】保護者のアドバイス
や意見に従うことが多い

【B】なにごと自分
で決めることが多い

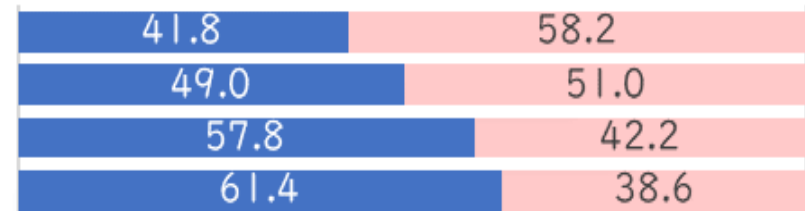


②困ったとき

(%)

【A】困ったことがあると、
保護者が助けてくれる

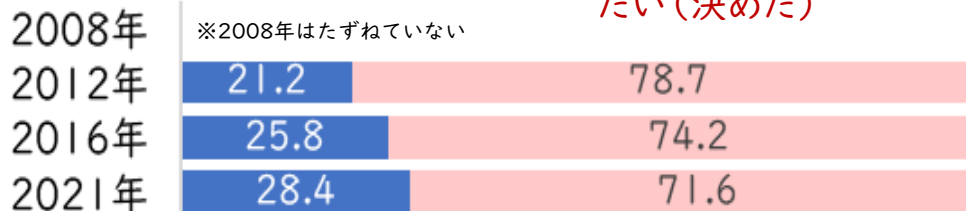
【B】困ったことがあると、
自分で解決する



③進路や就職に関する決定

【A】進路や就職に関し
ては、保護者の意見を重
視したい(した)

【B】進路や就職に関し
ては保護者の意見によ
らず自分の考えで決め
たい(決めた)



④小中学生の頃

【A】小中学生の頃、あ
なたが困ったとき、保護
者がだいたい解決してく
れた

【B】小中学生の頃、あ
なたが困ったとき、保護
者は手を出さずに見
守ってくれた

※2008年、2012年はたずねていない



◆学生の育ちの変化→保護者との関係性もどんどん変わっている

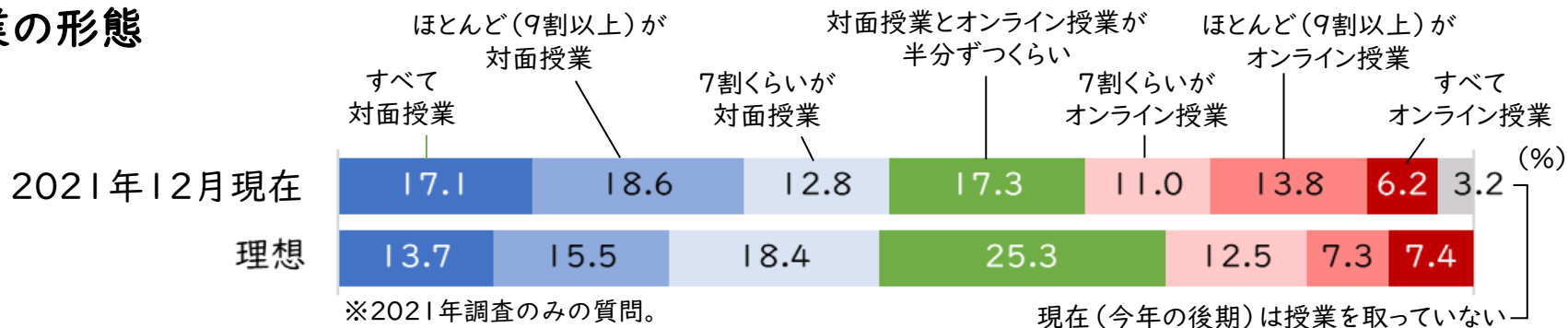
◆オンライン授業

【30】

●現在の授業形態は、「対面が多い」5割、「オンラインが多い」3割

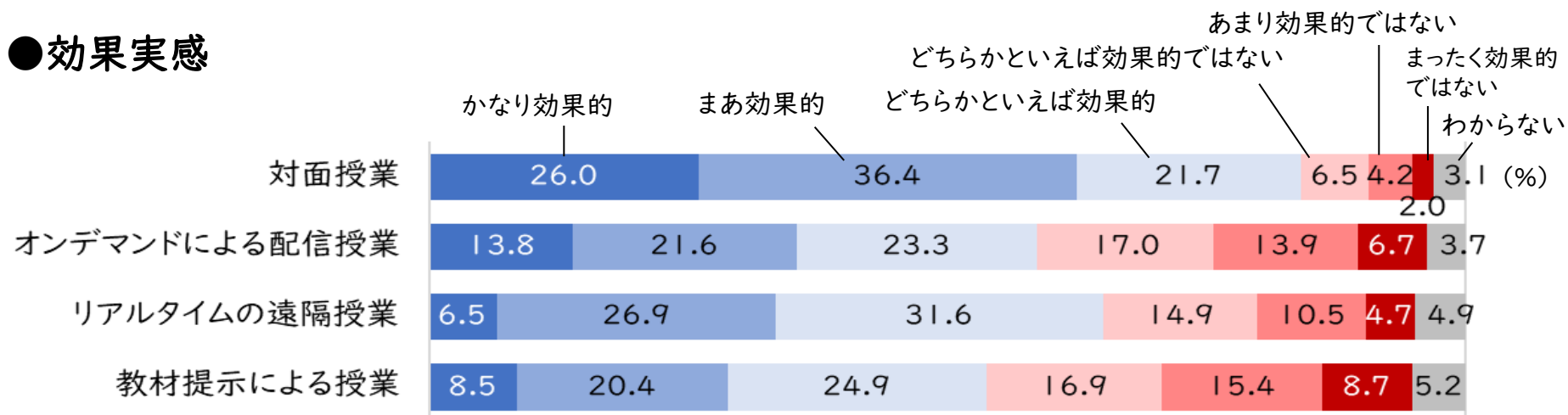
- ◆（現在）対面授業とオンライン授業は、どれくらいの割合で行われていますか。
- ◆（理想）対面授業とオンライン授業は、どれくらいの割合で行われるのが良いと思いますか。

●授業の形態



- ◆次のような授業の形態は、学習成果を高めるのにどれくらい効果的だと思いますか。

●効果実感



- ◆対面のほうが効果を感じているが、すべて対面では思っていない

◆学内の友人関係

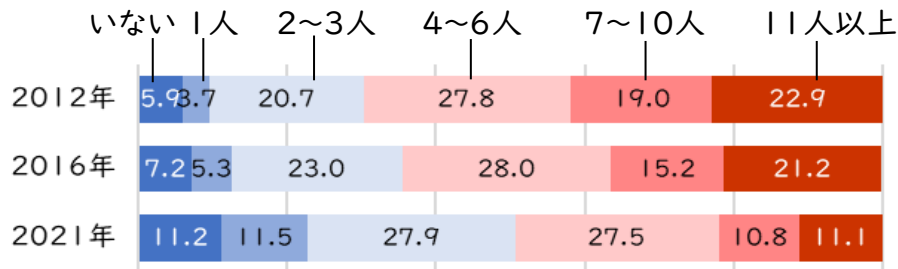
【31】

●16年→21年にかけて、すべての項目で「いない」「1人」が増加

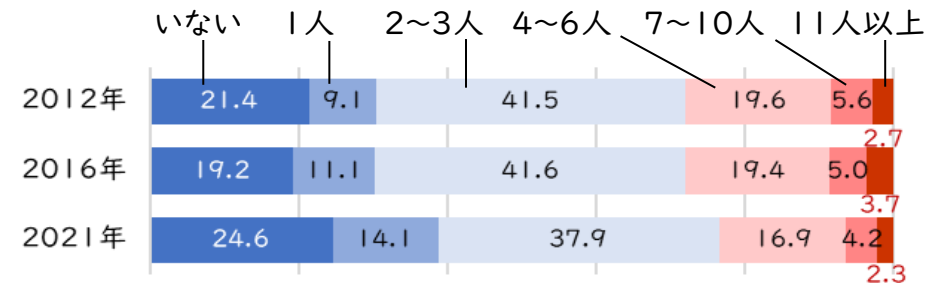
◆（大学内）次のようなことをする友だちは全部で何人くらいいますか。

(%)

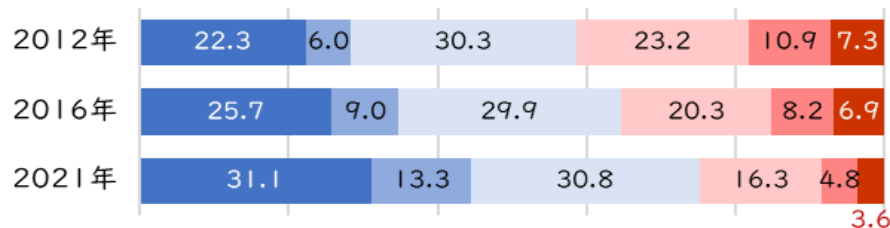
話をしたり一緒に遊んだりする友だち



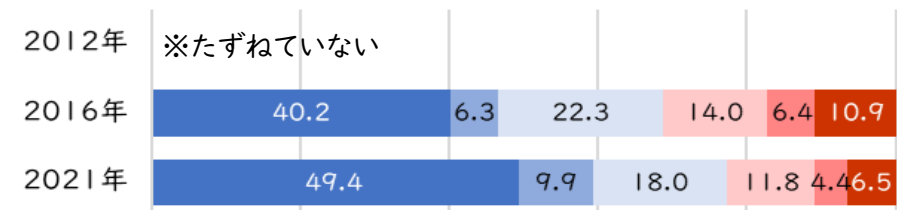
悩み事を相談できる友だち



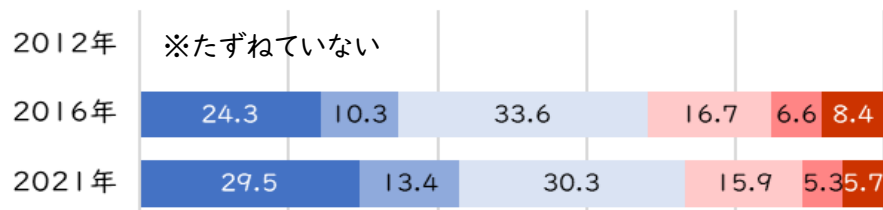
学習や広く社会の課題などについて議論をする友だち



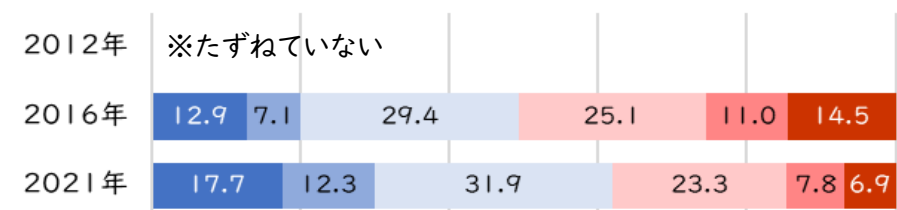
学習やスポーツで競い合う友だち



尊敬できる友だち



情報交換（授業や就職活動などについて）する友だち

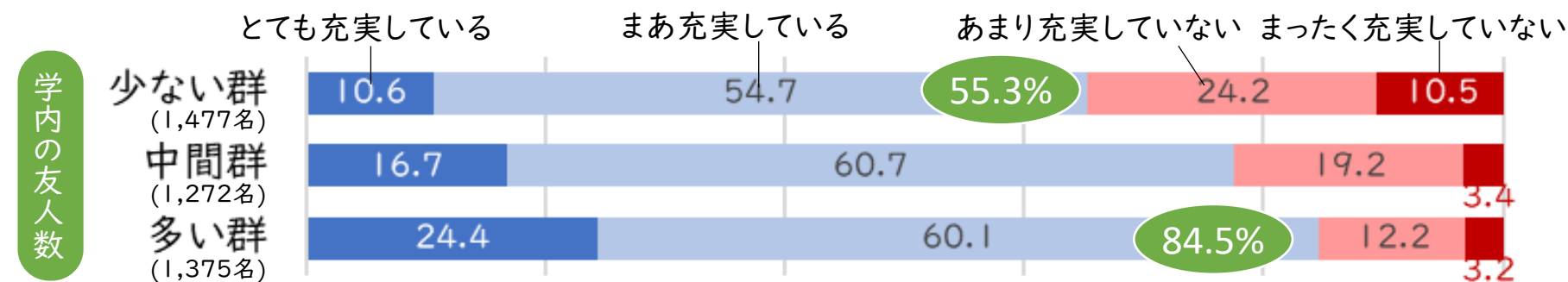


◆学びの充実度・成長実感×友人数

●学びの充実度や成長実感は、友人数と関連している

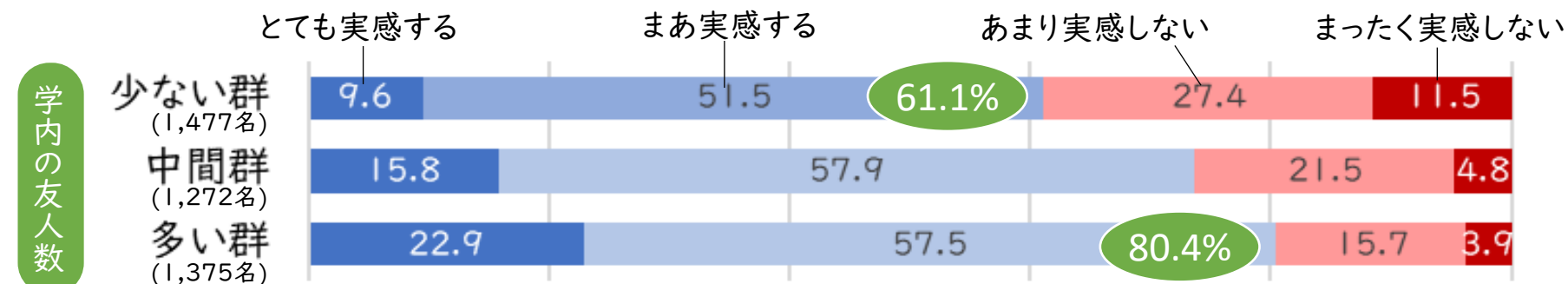
●学びの充実度

◆大学の各学年における学びの充実度について、あてはまるものを1つお選びください。(%)



●成長実感

◆大学の各学年における成長実感について、あてはまるものを1つお選びください。(%)



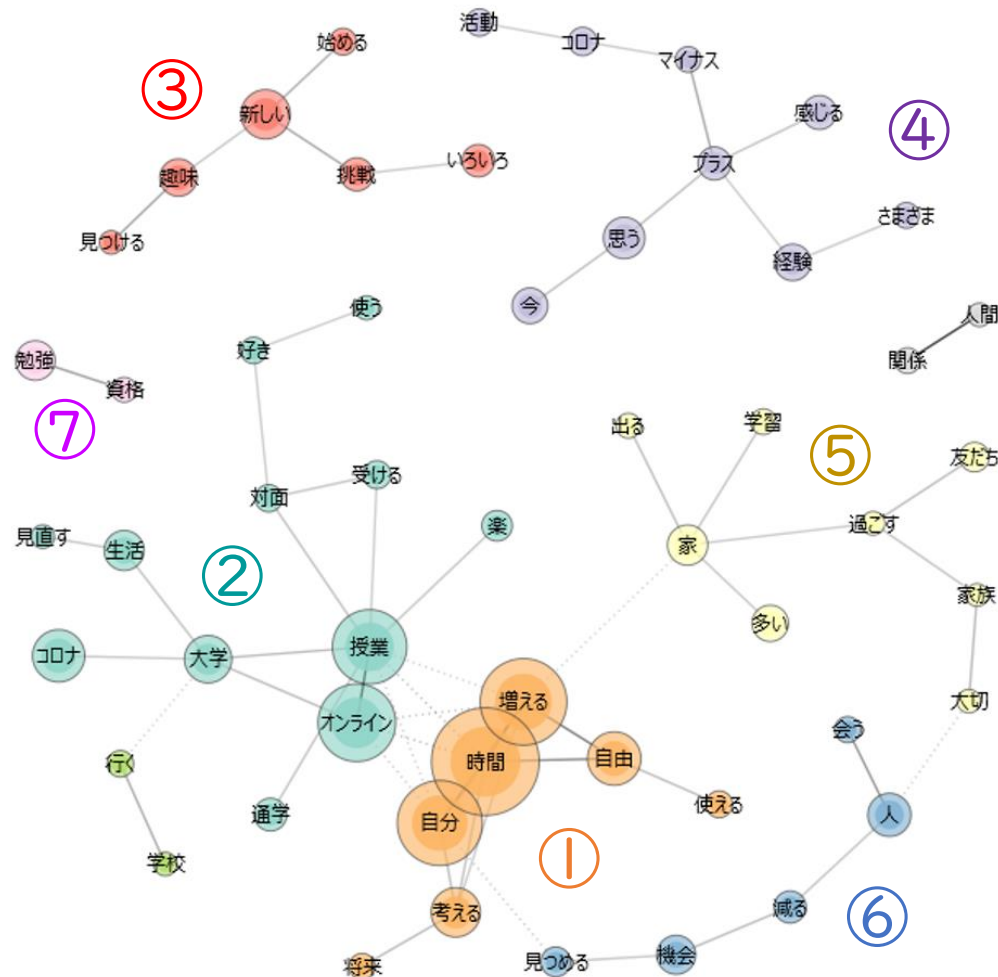
※学内の友人数については、「話をしたり一緒に遊んだりする友だち」「悩み事を相談できる友だち」「学習や広く社会の課題などについて議論をする友だち」「学習やスポーツで競い合う友だち」「尊敬できる友だち」「情報交換(授業や就職活動などについて)する友だち」「SNSで頻繁にやりとりをする友だち」の7項目それぞれの人数を数値に換算したうえで合算し、「少ない群」「中間群」「多い群」がそれぞれ3分の1ずつになるように分割した。

◆コロナ禍の影響—自由記述分析①

【33】

●コロナ禍の影響（p.53）に対して「プラス」と回答した学生

◆KH Coder（樋口2020）による共起ネットワーク分析の結果



●コロナ禍の経験が「プラスだった」と回答した学生の自由記述の主な結果

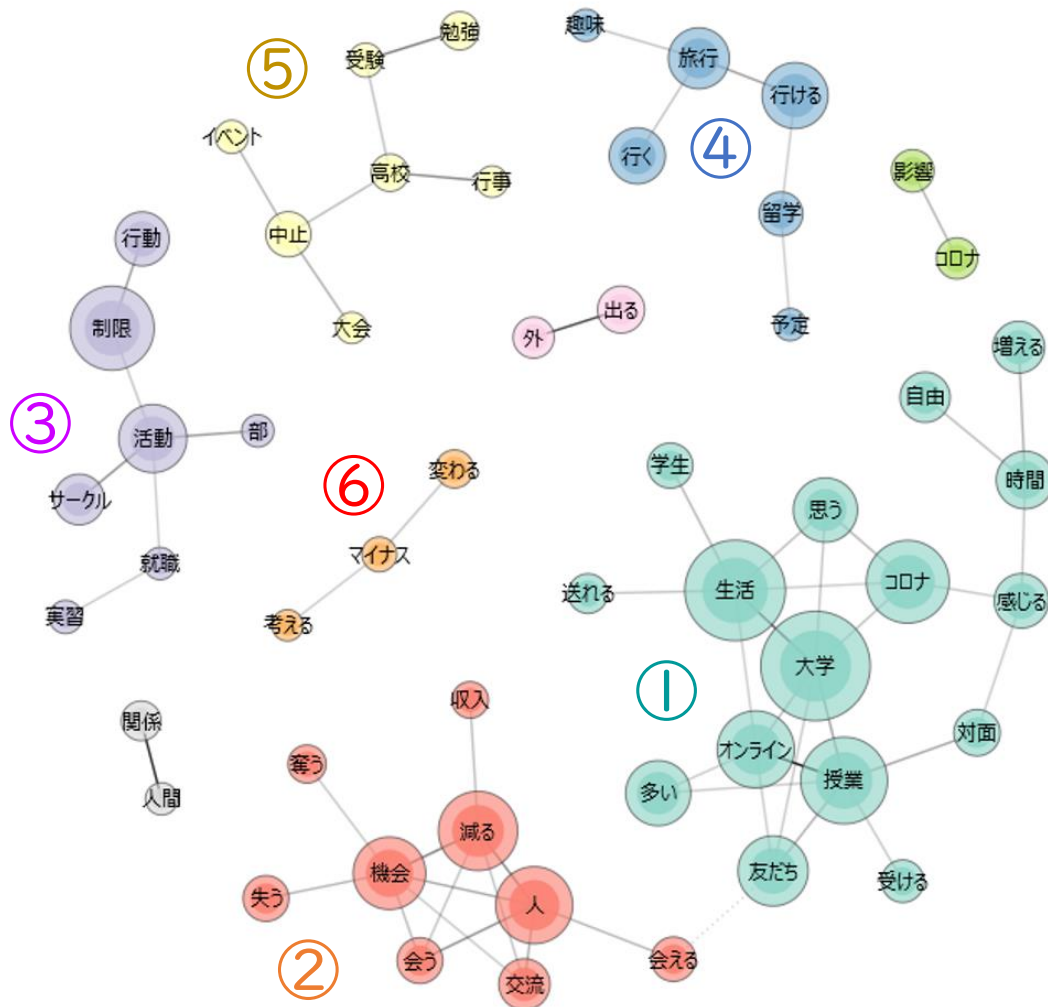
- ①自分の自由になる時間が増えた結果、将来や進路を考える機会になった
- ②コロナ禍で大学の授業がオンラインになり、それが自分に向いている、通学しないことが楽だと感じる
- ③いろいろな趣味や挑戦を行うきっかけになり、新しい趣味を見つけたり始めたりした
- ④コロナ禍にはプラスもマイナスもあったが、今になるとさまざまな経験や活動ができたと感じる
- ⑤家で過ごす時間が長く、外に出ることがなくなり、学習時間が増えるとともに、家族や友だちと過ごすことの大切さを感じた
- ⑥人と会う機会が減り、自分のことを見つめ直すことにつながった
- ⑦資格を取得するための勉強ができた

◆コロナ禍の影響—自由記述分析②

【34】

●コロナ禍の影響（p.53）に対して「マイナス」と回答した学生

◆KH Coder（樋口2020）による共起ネットワーク分析の結果



●コロナ禍の経験が「マイナスだった」と回答した学生の自由記述の主な結果

- ① コロナ禍で大学の授業はオンラインの授業が多くなり、自由な時間は増えたが、大学生活が変わった（オンライン授業に対するネガティブ反応は多数）
- ② 人と会う機会や交流が減った
- ③ さまざまな活動（サークル活動や就職活動など）に制限がかかった
- ④ 旅行に行くなどの趣味の機会や留学をする機会などがなくなってしまった
- ⑤ 高校での受験勉強がうまくいかなかったり、行事やイベント、大会などが中止になったりした
- ⑥ 生活面でマイナスになったり、考え方がマイナスになったりした（精神的に大変だったという回答が一定数あり）

※樋口耕一 2020 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して— 第2版』 ナカニシヤ出版

◆ 「学びと幸せ」の関係を考える

【35】

ハタチからの 「学びと幸せ」 探究ラボ



中原 淳

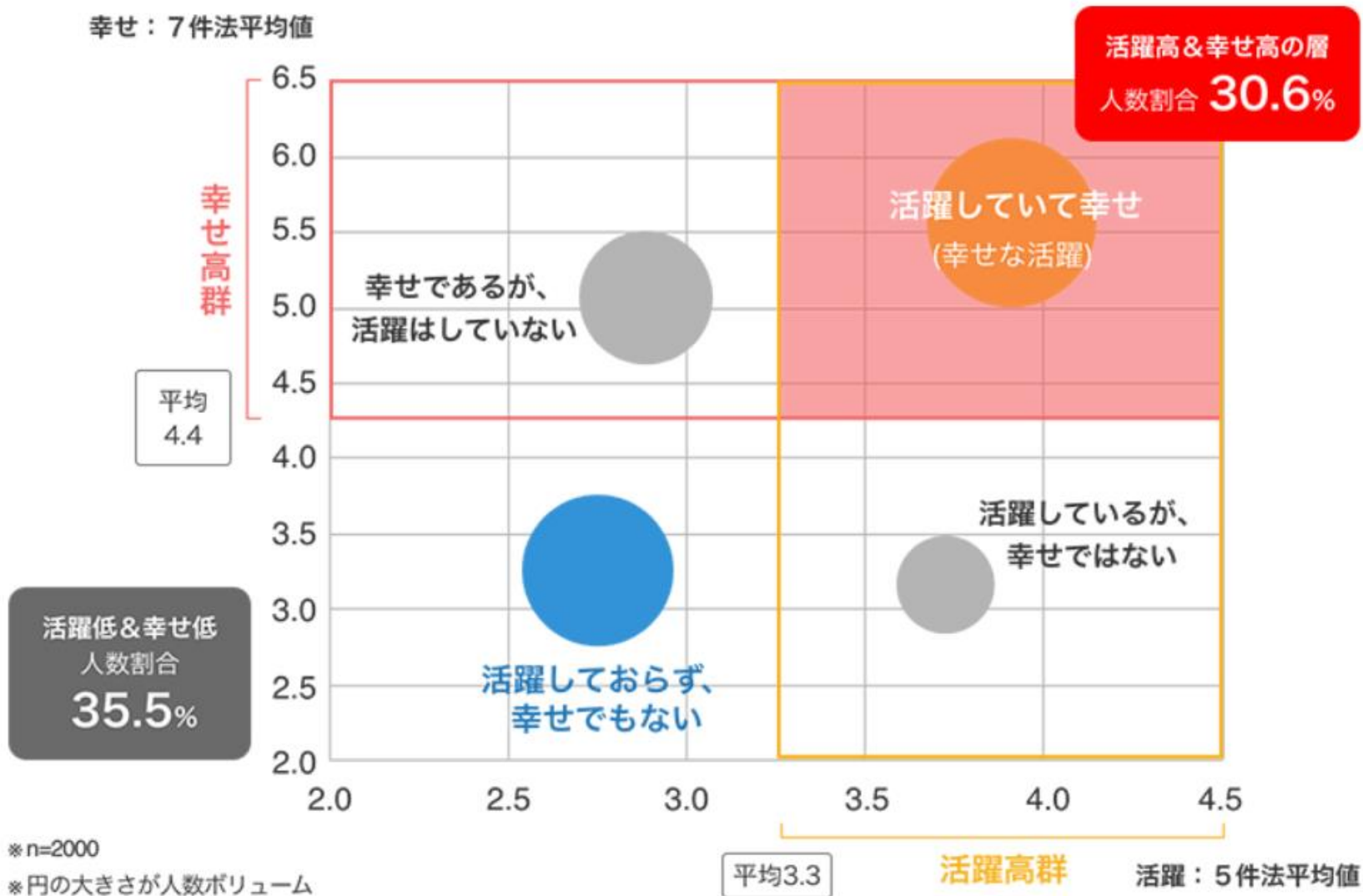
ベネッセ教育総合研究所

パーソル総合研究所

未来を生きる大学生～若手社会人が、「よく生きている」「はたらいて笑っている」未来をワクワクして描き、意欲を持って学びや行動へと向かうための羅針盤を届けることを目的とした産学連携の研究プロジェクト

◆目標=幸せと活躍の両立

幸せ：7件法平均値

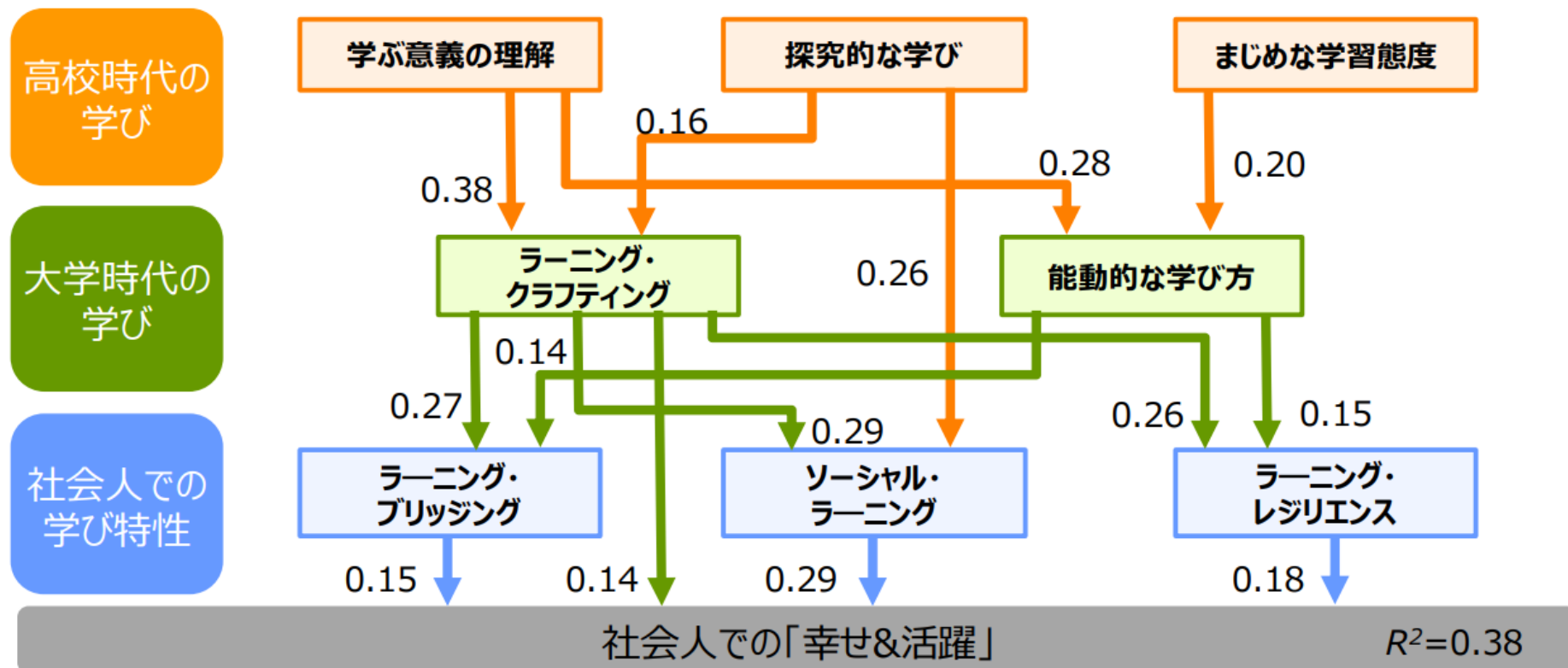


個人のジョブ・パフォーマンス

◆高大社での学びと「幸せな活躍」

●高校・大学・社会での学びは連続性があり、「幸せな活躍」につながる

◆高大社での学びが社会人での「幸せな活躍」に与える影響(パス解析)



カイ2乗値: 267.06(df=15,p=0.000) GFI=0.972, CFI=0.971, RMSEA=0.092 ※パスの数値は標準化回帰係数、共分散、誤差間共分散は省略した

- ①高校-大学-社会での学びには連続性がある
- ②大学での「ラーニング・クラフティング」が社会人での「ソーシャル・ラーニング」「ラーニング・ブリッジング」「ラーニング・レジリエンス」につながり、幸せな活躍をもたらす

※パーソル総合研究所・ベネッセ教育総合研究所・中原淳「若年就業者のウェルビーイングと学びに関する定量調査」2021年。

◆ラーニング・クラフティングの意義

【38】

幸せな活躍につながる学びの要素

ラーニング・クラフティング

自分の考えを深め、学びと社会や将来をつなげるなど、学びの意味づけをする

ラーニング・ブリッジング

いくつかの学びや経験を架橋する

ソーシャル・ラーニング

人といっしょに、人を巻き込みながら学ぶ

ラーニング・レジリエンス

失敗や困難なことから学ぶ、ねばり強く学ぶ

大学時代に経験しておきたいこと

自分が学ぶ
意味を考える

複眼的な物の見方・
考え方を学ぶ

異なる分野の人と
いっしょに学ぶ



異なる種類の学びを
架橋する

学びと社会の
つながりを考える

こうした経験は社会での「幸せな活躍」につながる

入学者育成研究会Webセミナー

新課程でどう変わる？25年度において 今、考える「学修者本位の入学前教育」

教育×広報で高大接続課題の解決をめざす株式会社進研アドより、
新課程世代の受け入れに向けて、各学部が今から準備すべき入学前教育について、
大学実践事例とともにお伝えします。

入学者育成に関わる学内関係者の方へ是非ご案内ください。

開催日：11月10日(木)・11月11日(金)

対象：大学執行部、教員、教務・広報職員

11月10日(木)
14:00~15:00



11月11日(金)
15:00~16:00



●Webセミナーの詳細と申込はこちら

<http://shinken-ad.co.jp/topics/2022/10/2210shinkatei.html>